Herman Melville の宗教的影響について (1)

岡　本　雅　夫

岡山理科大学教養部

(昭和61年9月30日　受理)

はじめに

Herman Melville (1819-1891) の作品にみられる宗教的影響は，アメリカの伝統的な神学思想である Calvinism によるものであるとされている。しかしこの Calvinism を核とする Puritanism は，アメリカ社会の生成発展の中で，分派の傾向を示し，18世紀の Great Awakening, 19世紀の Second Awakening が起るように，次第に liberal な解釈に基く神学思想を受け入れて，変遷していくのである。Melville が生れ，生涯を閉じた19世紀は，アメリカの歴史では，政治経済のみならず，宗教や文学の領域においても激動の時期であったと言える。Melville の宗教的影響を，幼児期から青年期にかけての社会の動きの中で考察し，宗教概念と現実社会に対する認識との関連で，Melville がどのようにしてその宗教観や人生観を形成していったかを研究したのが，T. Walter Herbert, Jr. の "*Moby-Dick and Calvinism*" である。Part one で，Melville が，彼の時代に権威を失いつつあった神学思想との内面的葛藤を伝記的に記述してあり，Part two では，その神学的思想との葛藤が "*Moby-Dick*" の中でどのように展開されているかを記述している。

小論文は，この Herbert の著作の Part one を，Melville の精神的苦悩と宗教的葛藤を生む原因となった父 Allan の死に至るまでを，伝記的に主要点をとらえて要約し解説を試みたものである。

1

Herbert は序文で，「Melville は，*Moby-Dick* を書こうとしていた頃に，彼の内面に発生していた精神的葛藤に直面していた」[1] としている。そして Typee を発表し，作家の道を歩み始めていた Melville は，その頃広範囲にわたって読書するが，「それらの読書によって生じた精力的な反応は，幼年期に彼の性格の一部になる心に深く滲み込んだ先入主や疑念 (preoccupation and uncertainties) によってひき起されたものである。

そして読書や経験によって得られたさまざまの真理の体系（schemes of truth）の中から，どれかを選び出すことができなかった許りではなくて，Melville の抱いた疑念は彼の心の中に深く入り込んみ，宗教的思考にふける Melville の人格の核心（personal center）が分裂したのである。Melville は，お互いに相入れないいくつかの理論の矛盾を，自分の深刻な葛藤として経験し，その苦痛に満ちた状況から退くどころか，熱にうかされたように瞑想に耽るのである。Melville は，自分の心の奥深くにある矛盾対立する真理の体系に挑戦することによって，彼の言う“正気の狂気の重大な真理（the sane madness of vital truth）を詳細に調べるために，自分の一貫した知的生活（the coherence of his mental life）を大胆にも危険にさらしたのである」[2] つまり，Melville にとっては，*Moby-Dick* は，究極的な真理をとらえようとする大胆な挑戦であって，しかもその挑戦を促したのは，幼年期に彼の性格の一部になった先入主や疑念であったとしている。それでは，この先入主や疑念はどのようにして植え付けられたのか，Melville の幼年期をたどって見ることが必要になる。Herbert は，その作業に入る前に，幼年期に植え付けられ，やがては性格の一部になる宗教概念（religious conceptions）は，いかなるものであるかを定義しようとする。

「宗教概念は，経験（の意味を理解する）究極的文脈（ultimate context）を述べるのであって，一種の認識の円周（a cognitive perimeter）を明らかにする，そしてその内部により直接的な意味の構造（more immediate structures of meaning）があって，意味の方向を定める基本的座標（fundamental coordinates）が敷かれている。宗教信仰とは（religious belief），人間が自分の生活を組織するのに用いる意味の体系は，一貫性のある究極的事実（a coherent final actuality）を把む手づる（purchase）で，それは，究極的な恣意（an ultimate arbitrariness）や，全くの偶然（sheer accident）の支配が人間の努力を決定する，という不安な思いを抑えるに十分な強い手づるであるという確信を伝えるものである」[3]

宗教概念とは，経験の意味を方向づける座標を内含する認識の枠組である。そして宗教的信仰は，ある意味の体系によって究極的事実を把握することができるという確信を与えるものであると言う。これは宗教の持つ普遍的意味を述べたものであろう。キリスト教，或いは，ユダヤ教やイスラム教のような，神を宇宙の中心に据える theocentrism の世界では当然理解されていることであっても，仏教や神道の伝統的文化の中にいる我々日本人には，一般に理解されているとは思えない。欧米のキリスト教文化を理解しようとする時に，非キリスト教徒である殆んどの日本人が，心得ておくべき概念であろう。

Melville の場合，「宗教的葛藤（religious conflict）は彼の文化が与えた明確な伝統的信仰に関する困惑（perplexities）を含むのであり，又究極的には信仰の無意味さと

いう可能性との対決，これは宗教的思考に本来生れる対決であるが，を含むのである」[4]
具体的には，「Melville の宗教的困惑は，彼が幼年期に吸収した Unitarianism と最も保守的な orthodoxy の対立する理論が原因である。彼がこの互いに敵対する伝統に浸されたのは，そのいずれかを受け入れることが不可能な状況の下で起ったことであり，それらの伝統の経験についての相入れない解釈によって呈示された問題に関して根深い先入主を与えられたのである」[5] Melville が幼年期に性格の一部となったこの先入主や，疑念がどのようにして植えつけられたのかを，Herbert は，1章の "A Proud Coherence"，2章の "Unitarian Tragedy" の中で述べる。

2

「現実に対する基本的認識は，子供時代に植えつけられる。Melville が育てられたアメリカでは，これらの基本的認識には，神学的思想が含れていた。そしてアメリカ以外の文化的背景では，基本的認識の焦点は，世俗的であるかも知れない」[6] と冒頭で Herbert は述べている。この点は，特に現代では，非キリスト教文化内にいる者が留意する必要があると思う。物質主義や科学万能主義が人間の思考を支配する時代においては特にそうである。

「子供時代に受ける最初の教育は，現実に対する究極的座標についての概念（a notion of the ultimate coordinates of reality）を確立し，この概念は，並外れていつまでも心の中に残るのである（extraordinarily tenacious)」[7]

Herbert は，幼年期における initial training を重要視している。これは心理学の領域で，特に教育心理学や発達心理学の領域では，常識とされていることであるが，特に心理学の立場から Sigmund Freud と，宗教教育の立場から Horace Bushnell の，それぞれの理論を取り上げて，宗教概念が子供に与える影響について述べている。先ず，Freud によると「宗教は，超自然的なもの（supernatural being）に対する信仰で，普遍的な心理的傾向がもたらす文化の産物であり，一種の幻想（illusion）である。そのような信仰は，現実との対応からではなくて，自然の恐怖，運命の残酷，共同生活の窮乏から保護されたいという成人の執拗な願望から力を得ている。人間は自分の経験の脅威的な特徴に無力であるから，幻想上の父なる神（an illusory Father）に向うのである。その幻想上の父なる神の指導力（leadership）は，子供に対する親の監督（parental oversight）であって，成人の不能力（impotence）は，幼児期の無力さ（helplessness）の再演である。かくして，この世での父の力と愛と脅威が神に投影される」[8]「神の思想は，子供が親に対して抱く感情を吸収する虚構（fiction）であって，この虚構は，この世の全ての幸福を神の如き父が支配していると信じるあの心地良さがなければ，現実の世界に

直面するのをいやがる成人の態度によって維持される。」[9] Freud の説は，人間は，宗教概念を植え付けられると，幼児期の父親の保護を頼りとする無力さを成人に至るまで延長し，医学的に奇妙な歪められた人間になり，現実に対する認識が不明確になる。従って現実に対する科学的な教育を（scientific indoctrination）すべきであると結ばれている。

神は，父親の力や愛が投影された幻想であるから，人間は，神の存在を信じることによって現実に対する認識を誤るという訳である。

これに対して，Bushnell はキリスト教による養育（Christian Nurture）（1861）の中で，キリストを信ずる者は，家族に関して，系統的法則（キリスト信仰体系）を持つべきで，その法則を子供を真の信仰に目覚めさせる（regenerate）ために用いるべきである。子供が教育されるべき現実に対する評価（estimate）は神を宇宙の中心とする概念である。「親は厳密に宗教的職務を果すべきである。子供の感情や良心の中に神を人格化（by personating God）することによって，子供の感情や良心を親に対して抱く敬虔さ（filial piety）に近ずけるべきである。不可視の父なる神（Father and Lord）が見出される時に，その子供には，すでに用意された敬虔さがあるべきだ。…家族宗教があるべきだ…子供たちは，神の思想や不可視の聖霊を最初から理解できないかも知れないが，子供たちには，神（Lord）として親が与えられ，神が親の中にいるのである。親の中に神が人格化し，対象化され，そのような親に対する敬虔さは，神に対する敬虔に変り得るもので，それが増すにつれて，親よりも高貴で見えざる父なる神に対する認識が訪れる。」[10]

Bushnell の Christan Nurture（1861）は勿論 Melville の幼児期には発表されていなかったが，アメリカでは，重要な神学思想についての著作で，現在も家庭教育の古典的書物として賞讃されている[11]ということは，アメリカの New England 地方における家庭の宗教的雰囲気を如実に示していると言ってよい。勿論これは，19世紀半ば頃から，Unitarian 信仰が盛んになるにつれて，神に関する自由な解釈が，キリスト教的伝統を弱体化するものとして，家庭における宗教教育の重要さを説いたものとされている。

Freud と Bushnell の理論は，現実に対する認識についての宗教概念を幼児期に植え付ける重大さという点で，かつ幼児の心理の中での父と神の重り合いについても一致しているが，Freud が宗教概念を排析し，Bushnell が宗教概念，神を中心におく概念の重要さを主張する点で，全く立場は異なる。しかし，この両者の理論は，Melville の幼児期における家族宗教の問題を考える時，Melville の父親に対して抱く感情，父親が招いた一家の窮乏や父の悲惨な死といった現実に対する Melville の評価を推測しようとする時，大いに参考になるのである。

Herbert は，Freud や Bushnell の宗教概念の教育がもたらした〝現実〟ではなくて，theocentric conceptions の意味の伝達の過程に焦点を当てている。「Melville の

家族の〝家族宗教〟(family religion) は，伝達する神の理念の連続に役立たなかった。theocentric conceptions という，Melville 家の遺産を完全に保つことができず，その遺産を精神的葛藤の母胎 (a matrix of psychic conflict) として伝達してしまった。」[12] Melville を究極的現実に対する theocentric な認識についての疑念と，精神的苦悩へと駆り立てる母胎となった家族宗教の伝達の適程はどうであったのだろうか。Melville の中で，Bushnell の言う神が人格化されるべき父，Allan Melville は，いかなる役割を演じたのか。Melville の作品では，*Moby-Dick* のみならず至るところで，父と子の関係が出てくることは，よく知られていることだが，この Allan の伝記的研究は，それを理解する重要な点である。

3

Herbert は，「Allan Melville の運勢が崩壊し，早く (49才) この世を去ったことが，Herman の子供時代の世界を粉砕し，彼の身近の家族を今まで占めていた富と社会的名声を享受する世界から閉め出したのである」[13] と言い，更に「Allan の没落とそれがもたらした結果は，息子が得ることのできる体系の宗教思想 (the system of reigious thouclt) の枠内では，解決できない謎 (enigmas) を呈示した。Herman が受けた宗教教育の逆説的な要素 (Calvinism と Unitarianism) が，全体として一貫した意味を持たなくなった (ceased to make sense in a coherent totality) ので，道徳的経験 (moral experience) を，神を宇宙の中心とする立場から理解できるものとして眺めることができなくなったのである」[14] と述べている。そしてこの不運が，Herman の苦悩に満ちた果しない瞑想 (an endless round of agonized meditations) の起動力とテーマを与えたのだとしている。Allan Melville の性格は，Melville の心に困惑 (perplexity) を創出した最も重要な点であり，Freud と Bushnell が「成人の神に対する概念は，子供の時に父親から受けた印象によって形成される」としている点を指摘している。

ここで Allan の性格について，Herbert の分析を離れて Edwin H. Miller の伝記から，主要な点を拾ってみる。Allan Melville (1782-1832) は，Tea Party 事件で名を挙げ，その時靴の中に残っていた茶を小びん (a vial) に入れ，神聖な家宝として Melville 家の人間に誇り，三角帽子に半ズボン (three-cornered hat and breeches) という当時の服装で，Boston の 'character'[15] となっていた Major Melville の二男に生まれている。しかし Major Melville は両親に死なれて孤児となった身から名誉と地位を獲得した人で，青年期には，聖職者を目指して New Jersey College (後の Princeton University) で Calvin theology を学んでいる。後に Boston の Brattle Square Church の member になった Unitarian であった。40年にわたる

Boston 港の徴税官の仕事で地位と富を築いていたが，息子たち（Thomas と Allan）の負債で結局は失うことになる。Allan は父親が，‘頼みの綱（my sheet anchor）[15]で，私の希望’とまでに思った息子であった。親の財産を当にし，数年ヨーロッパに遊学，フランス語を学び，かなりの書画を集めていた。1810年頃に画かれた肖像画[16]を見ると，正にヨーロッパに遊ぶ〝アメリカ人の放蕩者〟（American rake abroad）である。何か仕事をするとすれば，それに適した資格は，〝男前で，能力に並々ならぬ自信があり，能弁で，どうしょうもない楽天主義（good looks, no small regards for his abilities, the gift of verbalization, and invincible optimism）[17]である。Maria Gansevoort と知り合って結婚すると，Albany のオランダ系移民の名士で，Majore Melville に劣らない名声を持っていた General Gansevoort の亡き後の Gansevoort 家で，Maria の母 Catherine, 兄の Peter Gansvoort と同居で，新婚生活を送り，それは4年に及んでいる。長男の Gansevoort Milville と長女の Helen Maria Melville もこの家で生れ，一家が New York に移って，Herman Melville 生れている。しかし Allam は，Maria と結婚することによって，Gansevoort 家に経済的に頼りつづける。Peter Gansevoort への借金の申し込みの手紙は，彼の依存心（dependency）を何よりも有弁に物語っているのである。Herbert に戻ると，Allan は，父 Major Melville の宗教教育を受けた Unitarian であった。Gansevoort や Herman を Calvinism の正統を任じる Dutch Reformed Church で洗礼させ，家庭内できびしい躾をしていることは，Edwin Miller の伝記でも明らかにされているが，何よりも Allan が信仰について子供たちの心に印象づけたのは，曽祖父が Scotland の有名な聖職者であった（The Revd. Andrew Melville, a reformer and contemparary of John Knox）家門の名誉を不朽にするためである，ということのようであったらしい。Melville が生れる前年に Scotland の Levin にある Scoonie 教区を訪れ，かって曽祖父の Andrew Melville が実際に説教をした教会に入った時の感激を妻に書き送り，「心から真に敬虔な人の想い出を長く人々の記憶にとどめる立派な名を残したいと願った」と記しているが，Herbert は，「Allan の，この畏敬の念と敬虔な思いは，Melville 家の人間が神の福音と神聖な真理にかかわったことと，Melville 家の優れた記録によってかき立てられたことは確かである」[18]としているが，Miller は，「商売も自分の持っている魅力も度重なる借金で破産状態になってしまったので，一層哀れにも自分の家門の名誉にしがみついたのだ。前途に希望を抱いて眺めるほかないとしても，少くとも過去は，誇りを持って振り返ることはできたのである」[19]と Allan の性格にひそむ dependency と vain pride を指摘している。しかし，Bushnell の言うように，Allan は父として子供に徳目の重要さを説く適程で，自らの中に神を人格しようとしたと考えられないことはない。

しかし，Unitarian の Allan にとって，万物を統治する神（Sovereign Lord of all）は，浮き沈みの激しい New York の商業界の中では，冒険者のお守り（talisman）であったらしい。やがて Allan は，「自分自身が意識していたとは思われないが，いわば彼の性格に深く根付いている‘宗教的偽善’（pervasive religious hypocrisy）という罪を犯すのである。」[20] 1818年 New York で Gansevoort 家から独立して輸入業を始めて以来，借金に頼りながら，次第に下降線をたどっている商業の不振を挽回しようと，1827年に，破滅を招くことになった取引に手を出す。Peter Gansevoort にあてた手紙で，Allan の神の摂理に対する解釈が示されている。「今新しい事業を考えていますが，これはきっと大きく成功すると思います。人の行う事業（events）は，神の摂理に任さねばなりません。神は最初から結果をお見通しになり，部分的な悪を普遍的善と調和される（reconcile partial evil with universal good）からです。」[21] 保守的で Calvinist である Peter Gansevoort に自分の事業が投資に価する理由付けを神の摂理に求めているのである。そして次の手紙（1827年２月10日）では，事業の内容を明らかにし，利害にかかわる危機を解決したことを知らせている。自分が手を組んで仲買いの仕事をする人達の資金源は自分であって（自分の振り出す手形），自分の名前は表面に出ないことになっているから，仲間の会社は，実体よりも大きな財政的地盤があるという印象を世間に与えることができると言い，「全ては秘密裏に，当事者の信頼を失わずうまく行きそうです。というのは，全てが安全に，極秘にうまく神の恵みによって運ぶという根拠ある最善の確信を抱いているからです。全ての道徳的行動（moral conduct）を支配する神によって，霊感を与えられたもの以外の行動は，これ程の勝利となった結果を為し得なかったでしょう。それ故に神に，神だけに，全ての賞讃が捧げられるべきなのです。」[22)-1]

Allan は秘密に行う事業が，空手形に終る危険をはらむ秘密が，道徳的行動（moral conduct）であるが故に，神の恵みの故に成功したことを感謝する。最早，常軌を逸していると言う他ないが，更に Allan は，臆面もなく，仲間に保証した10000ドルの半分5000ドルを，Peter Gansevoort に借用しようと手紙を書く。「貴方にしか，この金は期待できない。…どうしても期限内に私の手に入るようにして下さい。…私の命よりも大切な名誉が奪われますから」[22)-2] やがて，残りの5000ドルの保証の期限がきて，再び Peter Gansevoort に手紙を書き，家族に対する忠誠心（family loyalty）に訴える。「貴方は，この私を評価（esteem）して下さり，私たちの Maria を愛して下さるのだから，友人であり，兄弟である貴方が，今も私がどうしても必要としている5000ドルについて，私を失望させるとは，とても思いません。次の水曜日４月４日かそれ以前にどうしても必要なのです。私の名誉に至るまで全てを失うことになるのです」[23] Allan の “moral blindness” が恐るべき程に現われている。Peter に借用の形で投資を強いているが，Maria

をその人質にとっていることにもし気付くようであれば，その名前を出しはしなかったであろう。Herbert は，「Allan が慈愛深い神が，最終的には恵みを与えてくれるという神の計画に対する依存心には，満足したひとりよがり（complacent smugness）の逆で，深い心理的緊張からくる熱ぽさがみなぎっている」[24]と分析している。Allan は，これまでに経験した苦労は，自分の heroism が宗教的信仰で守られていなかったら，自分を破滅させていたであろうと口にしていた。1828年の Peter への手紙で「私のつつましい，しかし熱烈な信頼，我々の父なる全能の神の絶えざる保護と最終的な恵みに対する信頼は揺らぐものではありません。この神に対する信頼のみが不安な長びく苦労に耐えさせて呉れたのでしょう。…」[25] Herbert によれば，「Allan の 'our Almighty parent' に対する自由な解釈は，自らの重大な道徳的二枚舌（moral duplicity）に目覚めさせるどころか，事態を有利に説明することが，内面の不安を抑える努力を正当なことだと弁明しているという確信となっていた」し，「Allan は，経済的にも精神的にも危い計画（a house of cards）を立て，神がそれを支えて呉れることを感謝していたのである。」[26]

Allan の性格，神の摂理に対する解釈は，正統カルビン派の解釈とは対極的なものであり，optinism に満ちているが，それは事業が悪化していくにつれ，精神的不安や緊張を抑える drug になってしまっている。Herbert は宗教的偽善，或いは道徳的二枚舌と Allan を極め付けているが，19世紀初頭の西漸運動の始りから資本の投機が盛んに行われた New York の商業界では，Allan のように危い橋を渡った人間は，少くはなかったのではないか。Allanが父親として，子供たちにどういう印象を与えたかは，彼の書簡などから想像する躾けの仕方や，神の摂理についての信念などから，ただ推測するしかないが，妻である Maria が，夫の窮状を苦にして，病い勝ちであったことなどから，Melville は，父親 Allan の説く神に対する誠実さを心に植え付けながらも，ぼんやりとは，現実の世界の只ならぬ気配を感じ取っていたかも知れない。それが決定的となるのが，Allan の最終的な破産と悲惨な死であることを Herbert は主張している。

4

Herman Melville は，1819年8月1日23時30分，New York, Pearl Street 123番地で生れる。8月19日，South Reformed Dutch Church の牧師 Revd. J. M. Mathews が慣例を破って，Melville の自宅で洗礼を施している。「子供は罪を背負って生れる。それ故に，あらゆる不幸（miseries）を受けねばならぬ。そしてその上神の断罪（condemnation）を受けねばならない。しかし，子供はキリストによって浄められる（sanctified in Christ），それ故に，洗礼を受けねばならない」[27]ことを，親に信じるかと問う，そして Dutch Chuch の教義を親が最善の努力を払って子供に教えること

を要求する。しかし Allan は，父親の影響を受けて Calvinism を自由に解釈する Unitarian であり，Maria は，オランダ系移民の Gansevoort 家がそうであるように Calvinism の正統な教えを聞かされて成長していたが，Dutch Church の正式な memder ではなかった。(夫 Allan の死後，正式に試問を受け member に加わっている)。尤も，この Gansevoort 家の影響で，Melville 家の子供たちは全て，Dutch Church で洗礼を受けている。Melville に，Calvinism の教義が，或る程度の知識として与えられ，その神学が影響を与えたのは，1824年，Melville 一家が Broome Street に移り，ここに新しく建てられた Dutch Church に通い始めてからであろう。そして家庭における父親同様に，幼い Melville に最も影響を与えたのが，この教会へ赴任してきた Revd. Jacob Brodhead であったと思われる。彼は Melville 一家と親しく交際し，その息子 John は，後年に至るまで Melville の友人であった。

Brodhead はカルヴィン派の牧師にあるとされていた冷厳さはなく，幼い者には優しい思いやりを示し，前任地の Philadelphia では，彼の説教に何千人という信者が悔い改めの涙を流したという人柄であった[28]。アメリカの Dutch Church は，福音に基く Pietism の強い伝統を持ち，19世紀の初めに 'second Great Awakening' に受容的であった。Yale College の Timothy Dwight に指導されたこの運動は，さまざまの宗派の間できびしい神学論争を引き起したが，Dutch Church はその中で，き然として正統性を保ち，ひたすら伝統的なカルヴィン派の福音主義を説いたのである。Brodhead は 'Awakening' に参加し，信者に聖書の物語りを話し，共通した人間性を示し，道徳が生活に応用し得ることを感じさせたが，「彼の情熱的な訴えの核心には，神の恩寵 (Grace) の，悪を善に変える力 (transforming power) への信仰があった。厳格なカルヴィン主義の中で，彼は，人間の罪の絆 (man's bondage to sin) は極めて強いが故に，聖霊の贖いの仕事 (the Spirit's redeeming work) によって，道徳的回復がなければ，人間の性格の重要な変化は起らないと信じた」[29]Brodhead は「福音のみを説き，極めて卒直，かつ直接的に，救済或いは道徳的改革の手段として，福音以外の何物にも信を置かなかった。」「キリストの言葉を説く以外の何物でもないことを主張し，それを終始通した。彼の人間に対する敬意，優しさと情熱は，人々の心をとらえ，その胸を電気のように揺り動かした」[30]という。Brodhead が Broome Street の教会にやってきた時，Melville は7才であったから，複雑な教義に関する説教の内容は理解できなかったことは明白である。「しかし影響が無かったとは言えない。Brodhead が示した神の教えに誠実な人間としての手本は，父親がすでに与えていた印象を強めたであろう。というのは Brodhead は，宗教的献身が不可欠の要素である (英雄的な) 男らしさ (heroic manliness) を示したからである。

「神に鋭く集中され，言葉で明確に表現される献身によって，Brodhead の道徳的性格

が形成されている」ということは，キリスト教の theocentrism の重要なテーマが，具体化されていたからでもある。この豊かな情緒的な力を包含する heroic な道徳的調和は（moral harmony）は，Melville にとって宗教的直正さ（a criterion of religious authenticity）の基準となった」[31]Herbert は，Brodhead の与えた影響は，神の福音を説く敬虔で誠実な人格によるだけではなくて，やがて Calvinism の神学思想にまで及ぶようになる。

独立後のアメリカでは，人間の罪と悲惨は，神の摂理で，それには人間にその責任があるという，Calvinism の見放し（reprobation）の思想は，次第に背を向けられ始める。しかし，Dutch Church は，この動きに敢然と反対し，この教会を緩和しようとする努力は Arminianism[32]であるとして非難した。そして Arminianism が盛んになるのは，人間が持つ性来の神に対する憎悪（hatred）の証拠であり，人間が自ら身を投じた公約的悲惨の故に神を告発しようとする瀆神的努力（a blasphemous effort）であるとした。Dutch Church は，信仰者告白をした Calvinist が，伝統的教義を緩和しようとする努力に反対し，1824年 Synod は正式に神の贖罪（redemption）は，永遠から救済されると予定された特定の人間に限らないという Hopkinsian と呼ばれる教義を非難した。「罪人（sinners）が贖罪（redemption）の選別に示される神の統治に対して服従しないのは，堕落した人間の本性の異端（heresy）である。Arminianism の信仰体系は，神と神の属性に対する人間の心にある敵意（enmity）と同質である」[33]と発表したのである。この Arminianism を大胆に主張したのが，William Ellery Channing で，1819年，Melville が生れた年に Boltimore で行った，'Unitarian Christianity' は，Calvinism の教義をめぐる論戦に一つの区切りをつけたとされている。

Channing は，「Calvinism の正統的信仰は，神学者よりも不屈の敵，つまり人間の精神の進歩，福音の精神の進歩という敵を相手に戦わねばならない。そしてこの敵から神秘と，形而上学的微妙さに包まれた Calvinism を守ることはできない」[34]と攻撃した。このような Unitarianism などの運動が段々と広まってくるにつれて，Dutch church は，これに対抗して，Melville のような子供に教会が宗教養育をしようと，1828年 Brodhead が中心となり 'Sabbath School Union' を発足させる。その眼目は「若い人達の心をつかみ，彼らに十分にしかも根本的に，カルヴィンによる我々の神聖な宗教のとりである宗教改革の基準（the standards of the Reformation）を教える」[35]ことにあった。

Sabbath School は，カルヴィンの正統的な聖書の解釈から離れた聖書についての教育が，子供の心に，自己欺瞞的な，自由にものを考える精神などを培うことを恐れたのである。Melville はこの Sabbath School が発足した時，9才であったからその熱気は十分に感じたであろう。そして，信者に対する牧師による問答式の教育（catechetical

instruction）は，Sabbath School が開かれていても，教会法によって実施されていたという事実は，教義についても Melville がかなりの知識を得たと思わせる。「Melville の聖書の知識は深く，広範囲にわたっているが，子供時代の知識はこの頃のものであることは確かである。彼の作品で，そして最も *Moby-Dick* の中で，決定的に聖書の教義背景として，それを素材として利用している。そして彼は十分にかつ根本的に教えを受けた人間の持つ精通さを示して，カルヴィン派神学のモチーフを扱っている」[36)]

一方で，Melville は，Allan が理事をしていた New York High School（アメリカにおける High School の歴史は，1827年 Messachusetts 州が，800家族以上の各町村に一つの High School を設立し，数学，簿記，米国史等を教えるべきことを規定した法律を制定したことに始る。それ以前はいわゆる Academy が設立されていた）に通っていたが，High School では，むしろ Sabbath School が反対するような自由な知的探求が奨励されていたし，Allan もヨーロッパに遊学した経験もあって，子供が学問することには熱心であった。

このようにして，Melville が物心ついてから，Sabbath School や High School に通っていた1829年頃までは，父 Allan の事業が浮き沈みがあったりしながらも，夏休みには，年中行事のように Boston や Albany の祖父や祖母を訪ねたりしながら，家庭にあっては父親や母親の，教会では，牧師の養育によって，云えば順調に宗教的な影響を人格に滲み込ませていたと思われる。

5

借金で保証した手形を弁済するという危い綱渡りはついに，債権者たちの知るところとなり，Allan は，命よりも大切と思っていた‘名誉’に対する評判を失う。1830年10月店を閉じて，New York から Albany へ移る。この時 Allan の残した負債は，父親の不動産の相続分を超えていたという。しかし Melville と兄の Gansevoort は，New York から移った4日後に，Albany Academy に入学する。ここで Melville は，商業科に入る準備の勉強を始め，その学年の終りに‘ciphering books’の部門で first prize を得ている。Albany は Gansevoort 家の本拠地であり，Peter Gansevoort の資金を頼りに何とか懸命に新しい事業を再出発させようとする。1831年の12月，New York からの帰りに蒸気船で Hudson 川を渡ろうとするが，凍結しているために，結局 Greenbush から12月10日の夜，零下2度の中を寒気にさらされて徒歩で川を渡って帰宅する。極度の精神的，肉体的疲労にもかかわらず何とか仕事をと精神的緊張と不眠の続く中を努力をするが空しく，1832年の1月の第1週の終りに床に就く。「Allan は，病床にあって，Boston の教会の牧師をしていた Buckminster の説教書を開いて，こ

の優れた Unitarian の言葉の中に，自分の苦境の意味を知る手がかりを見出そうとした。そこには "The advantage of Sickness" という説教があり，「不幸や災厄は，神の罰（punishments）という装いを着けているが，決して罰のためでなくて，罪深い人間を矯正（correction）するために与えられるのである」[37]と記されているが，しかし，Allan は当然のこととして，自分の破滅を招いた背徳的な商取引に対して良心の苛責を覚えていたであろう。Buckminster の説教は，Allan に効果的な慰安を与えなかった。1月9日，時折，精神の異常を示し，10日には，一層ひどく，「発狂した人間のうつろな顔を見せています」と Peter Gansevoort は，Major Melville に知らせている。そしてそれから2週間は，時折家族を病床に呼びよせたりする程の正常さを取り戻すこともあり，全く狂気に陥る前に聖書を読み，詩篇（Psalm 55）を開いて二つの詩に印しをつけた。"My heart is sore pained within me. Fearfulness and trembling are come upon me and horror hath overwhelmed me"[38]

Allan の信心深い自信は崩れ落ち，神の断罪に対する恐怖におしひしがれて，錯乱状態が続き，1832年1月28日23時30分，死去する。3日後，Maria は Dutch Church の共同墓地に夫 Allan を埋葬した。

3月1日，13才にまだならぬ Melville は Gansevoort と共に Albany Academy を止めて，商業科の勉強を生かして New York State Bank で，事務員（clerk）として働くことになるのである。

「Allan の死に対する Melville の反応は，彼の生涯の作品に甚大な影響を与えた。このことについての研究をする人達の間で，解釈は異なるが，十分に認知されていることは "失われた保証と権威の探求"（A search for the lost security and authority）と，偽りの "父と父なる神" を告発しようとする衝動（an impulse to indict false "fathers"）が，連綿と続く Melville のテーマであると定義して良いかもしれない" ということである。」[38]Melville が，父の死を悲しむ情緒的衝動（trauma）が，普通以上に長引いたことについては，多くの人が認めているが，重大な問題となるべきことは次のことである。「外側から見れば，Allan の運命は，彼の自由な，楽天的な教理に皮肉な解説を与えるものだ。しかし Melville は，家族として経験したために，父親の信仰の教訓を批判できる立場にはない。Allan の楽天的な信仰と悲劇的な死との矛盾に思えることは，Melville にとっては，現実の世界の明白で確かな事件として経験されることであった。神の摂理によって，神が人間に関する事柄（human affairs）を秩序づけていることは，Melville にとって議論すべき仮定ではなかった。問題となるのは，神が存在するかどうかではなくて，'神の本性（His nature）' が人間の経験の中にどう表現されるかということであった。父親の死は，神の正義は神秘的でないと信じていれば，その問いに対

する答を用意していた。即ち神は人間の働き（work），人間の行動の明白な倫理的特質に従って，人間に報酬（reward）を与える，或いは罰（punish）を与えるということであった。もしも，Melville が，父の行為が彼の運命にふさわしい罰を思わせる程に罪深い（guilty）のであると信じるならば，この論理は，Melville にとってもその権威を維持し得たであろう。しかし Melville が父親に抱いていた記憶は，悪徳に対する警告としてではなくて，美徳の輝かしい手本として作用していたと思われる。Redburn の中で，父親に対する尊敬の念を述べている—“私は，いつも父親は素晴らしい人だと思っていた。私なんかよりはとてつもない程，純粋で，偉大な人だ，決して間違ったことをしたり，真実でないことを口にできるような人ではない”—このように，父の性格についての考えを持ち続ける限り，父の死を，神の摂理（Providence）に対する自由な理解をする範囲内で解釈することはほとんどできなかったであろう。逆に Melville は，Allan は不公正に倒されたのだ，そして更に，神は彼を裏切ったのだという結論に近づいたであろう。Allan が繰り返し，‘神は逆境にあっても支えてくれる。あらゆる試練に耐える精神力を与えてくれる。そして，最終的には成功を与えることによって，神に忠実で，美徳的人間に対する神の恵みを示して呉れるであろう’と主張していたことを思い起し，この主張を額面通りに受取るならば，Melville は，Allan の努力に対して報酬として与えられた事業の失敗と精神的崩壊をどう解決すべきなのか。

Melville の人生の初期において，父親は美徳的で，神は公正であり，人間と神の善きことは幸福に調和しているという印象を植え付けられていた。しかし，父の死の宗教的意味を考えると，この神と人との善きことの調和に対する信念を持ち続けることはできなくなる。父親の美徳を理想化して回想する Melville の心の中に，神の本性（God's nature）に対する自由な概念についての深い懐疑を構成する要素があった。しかし Melville には，父親が信仰を公言する態度の中に，致命的弱点（宗教的偽善）があると感じる程の直観力は持たなかったであろう。彼は，自分を当惑させるさめた思いを振り払うように，より一層父親の道徳的完全さに執着したであろう。成人になって Melville は徐々に，宗教的真理に対する彼の探求の複雑さ（perplexities）は，何となく父親の例が彼の人生に与えた衝撃からくるものと認識するようになった。」[39]

Herbert の，Melville に父親の死が与えた宗教的意味の分析は，更にこの後で Pierre を引用して，父に対するイメーヂの崩壊が Melville を一層深い精神的苦痛と宗教的葛藤に投げ込むことを指摘している。

Melville が12才の時に父親の死に直面し，それによって，父の保証と権威を失い，精神的彷徨を始めることになるのは，例えば Edwin H. Miller が “not only did Herman become an Ishmael in his feelings of orphandom, but twelve was tatooed

on his memory calendar, to commemorate the beginning of his mourning"[40]と指摘している通りであろう。12才という数字が Melville の記憶に刻印され多くの作品の中で登場人物と結びついていることを示していることからしても Allan の悲劇的な死が与えた衝撃が Melville の作品を読む一つの手懸りであることに間違いはない。

結び

この小論は，Melville の作品，特に Mardi 以降，Pierre に至るまでの，そして Billy Budd を最後に，Melville の精神の苦悩と宗教的葛藤の根源を，幾分でもつかめたらと思って読んだ T. Walter Herbert の，'*Moby-Dick and Calvinism*' の part one，しかも Melville の父親の死に直面する12才までの，inside story を読んで日本語に訳し，要約したに過ぎないが，その過程でいろいろと研究書や評伝などを読んで，矢張り，詳細な伝記的研究は，作家の作品の解釈には必要であるということを，特に Herman Melville の場合痛感する。文学作品が作家の手を離れると最早それは読者のものであるとは言え，Melville の難解さは，文体や修辞法にとどまらない。核心にある葛藤が何であったかを，つかんでおくことが肝心である。Melville を理解しようとする過程で，最も胸を打たれるのは，アメリカの植民地の開拓に人生を賭した人達が，自然の脅威の中でいかに神と共に暮らしたかという事実である。神の福音がいかに様々に解釈されたか。元来 Protestants であったものが，更に protestants を生み，いかにさまざまに分派していったか。その論争の中で，いかに多くの人達が，苦悩や葛藤に追い込まれたか。神と共に生きようとする懸命な気持がひしひしと伝わってくるようである。Melville は，19世紀初頭から，西漸運動がおさまる世紀末まで，変遷するアメリカの現実を目撃しながら生きたが，敬虔に，神を畏れる New England の宗教的風土を代表する一人であり，その宗教観を独創力によって表現したと言える。今 Melville の少年期の有為転変を想像していると，"Call me Ishmael" と，孤独な少年が，自分と同じ境遇の少年たちに呼びかけているように思える。人間，幼い頃を振り返ると誰しも感傷的になる。

Melville は，Captain Ahab の monomaniac な生き方の背後に，12カ月足らずで孤児となった哀れな子供の悲しみを漂わせている。Seff-pity をさげすむ程強い人間がどれ程いようか。Melville の作品を，読む者の一人として，少くともこの Melville の心情に共感を寄せることが彼に対するより深い理解となるように思われる。

T. Walter Herbert, Jr の著作は，作品からの references を取り入れ，Melville を詳細に論じているが，これについては，次の機会に，焦点を絞って取り上げてみたいと思う。

参 考 文 献

The Melville Log	Jay Leyda
Melville	Leon Howard
Melville	Edwin H. Miller
Melville's Quarrel with God	Lawrance Thompson
The Early Lives of Melville	Merton M. Sealts, Jr.

引 用 文 献

	Moby-Dick and Calvinism		T. Walter. Herbert, Jr. (Rutgers University Press)
1)	Introduction:	P. 2	
2)	〃	P. 2	
3)	〃	P. 4	
4)	〃	P. 4	
5)	〃	P. 5〜6	
6)	I A Proud Coherence	P. 23	
7)	〃	P. 23	
8)	〃	P. 23	Sigmund Freud, The future of an illusion; trans. W. D. Robson-Scott (Garden City 1957)
9)	〃	P. 24	
10)	〃	P. 25	Horace Bushnell, Christian Nurture. Introd. Luther A. Wiegle (New Haven, 1967)
11)	〃	P. 25	
12)	〃	P. 26	
13)	II Unitarian Tragedy	P. 45	
14)	〃	P. 45	
15)	Melville Miller	P. 57	
16)	ibid	P. 59	
17)	ibid	P. 59	
18)	I A Proud Coherence	P. 27	
19)	Melville E.H.Miller	P. 61	
20)	II Unitarian Tragedy	P. 46	
21)	ibid	P. 47	
22)-1	ibid	P. 48	
22)-2	ibid	P. 48	
23)	ibid	P. 50	
24)	ibid	P. 51	
25)	ibid	P. 51	
26)	ibid	P. 51	
27)	I A Prooud Coherens	P. 28	
28)	ibid	P. 35	

29) ibid P. 35
30) ibid P. 36
31) ibid P. 36
32) ibid P. 38
33) ibid P. 40
34) ibid P. 41
35) ibid P. 42
36) ibid P. 42
37) ibid P. 52
38) ibid P. 53
39) ibid P. 53～P. 55
40) Melville Edwine Miller P. 70

On Religious Influences on Herman Melville (1)

Masao OKAMOTO

Faculty of Liberal Arts and Science,
Okayama University of Science,
1-1 Ridai-cho, Okayama 700, Japane

(Received September 30, 1986)

In this study, the writer gives a summary of the part one of *Moby-Dick and Calvinism* by T. Walter Herbert, Jr. with a view to tracing the religious perplexities and psychic conflicts of Herman Melville to the death of his father, Allan.